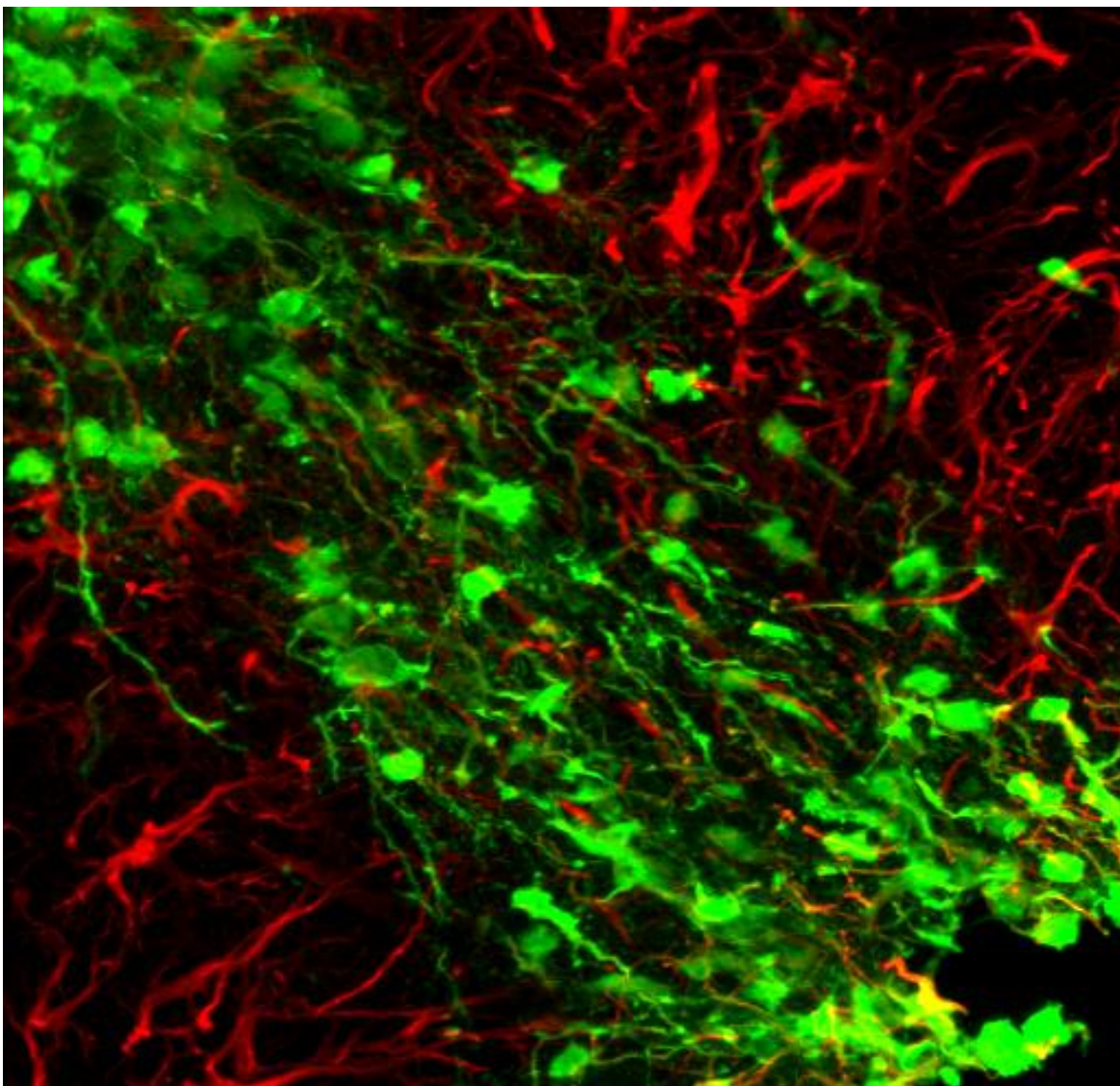


學術のビッグバンに立ち向かう。



脳に移植した神経幹細胞。私たちの最も身近にある小宇宙で繰り広げられるドラマはどんなものなのだろうか。

學術への興味のめばえ

あの娘は何を考えているんだ？ 奴は
いったいどういうつもりなんだ？
今思えば、これが僕の科学への入
り口でした。大好きな彼女が何を
考えているのかをもっと知りた
い。自分の気持ちや考えを、ちや
んと伝えたい。そんな素朴な気持
ちから、「心」に関する学問（心理
学）を志すようになりました。

心理学といえば「深層心理」と
か「臨床心理」のイメージがとて
も強いようです。私も初めはご多
分に漏れず、臨床心理士を目指し
ていました。しかし、客商売が苦
手なこと、そもそも理系頭だっ
たことが相まって、いつしか心を
科学的に研究したいと思うよう
になりました。

自分や他者の存在って？

そもそも心理学という学問はヒト
がヒトに興味を持ったときから始
まった学問といえます。多くの先
人達が様々な形で問い、議論して
きた対象である「自我」を学問す
る領域なのです。つまり、問うこ
との始まり、言うなれば学問のビ
ッグバンの様な存在ともいえるわ
けです。自らに対する問いはもち
ろん、自らと対比することにより
認識される他者（客体）への問い
かけもここから始まったものと考
えられます。



Shoji Komai

● 1970年大阪府生まれ。NAIST バイオサイエンス研究科博士課程修了。神戸大学医学部、Max-Planck 医科学研究所を経て 05 年、NAIST へ。専門は神経科学。

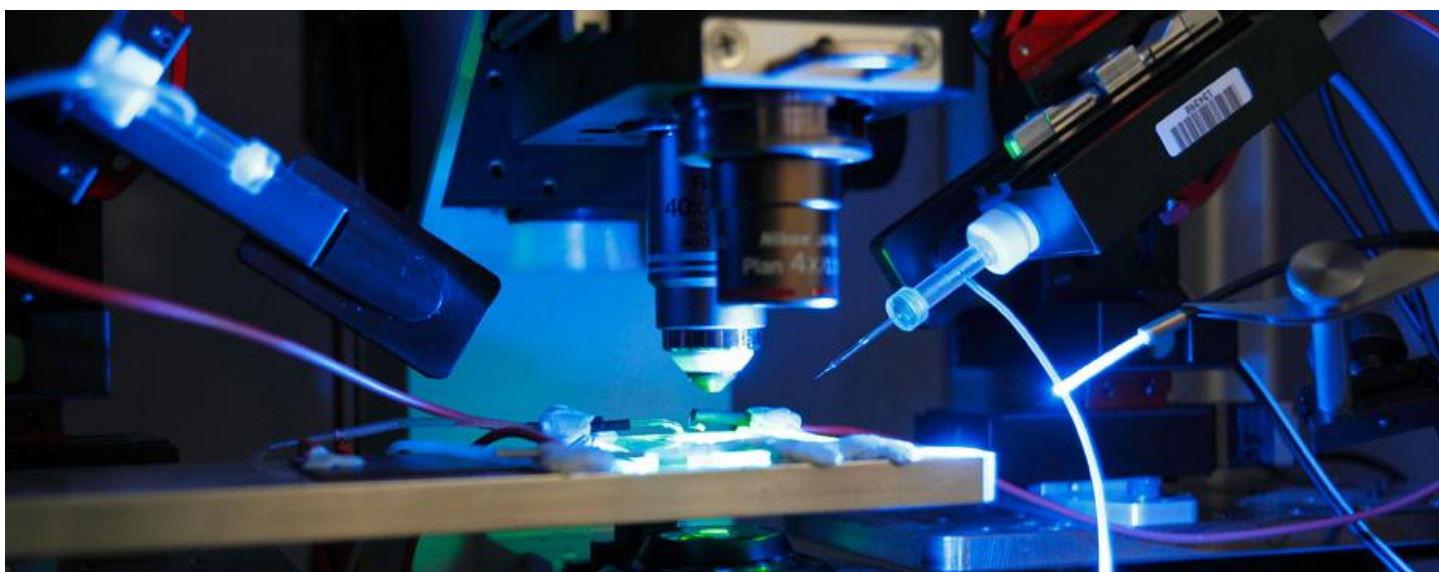
そこからありとあらゆる学問体系
が生まれたと言っても過言ではあ
りません。ですので、その性質上、
その研究分野は多岐に渡ってお
り、数学から物理学、生物学や社
会科学、哲学に至るまで、ヒトに
関わることの全てを含んでいると
いえるでしょう。近年巷でよく耳
にする融合領域のさきがけといえ
るでしょう。すなわち、「心」とい
う問題（イシュー）に対していか
に取り組むかが、心理学の中で
の細分化の様式であるといえます。

どこまで分解できる？

初めに考えたのは物理学。やっぱ
り事物を記述するためには物理学
が良いのではと思ったからです。
そこで生物物理学の入門書を読み
あさり、自分の興味のある学問に
ついてよく考えました。しかし、
生物の膜の構成や、イオンチャネ
ルの挙動と私たちの心の動きとの
距離を埋められる気がしませんでした。
じゃあ、どこのレベルから
見ていけば心の実態を客観的に記
述できるのか。そこで行き着いた
のが「生理学」です。生きる理を
知るための学問の観点から心の理
を見通す。まさに僕が求めていた
研究はここにあったのだと気づき
ました。



雑踏の中には様々な人生が交差し、時には相互作用を生み出す。個々の人たちが星や細胞のように振るまい、集団が宇宙や生き物のように振る舞う。



「光」によって特定の神経細胞を選択的に刺激することができるようになった。人類の希望の光となり得るのか...

脳と心

では、「心の場」はどこにあるのか。すぐに思いつくのが、「脳」だったわけです。未だに議論されることですが、脳と心の関係はとも複雑で一筋縄では行きません。脳はいろいろな機能を持っていることは誰も異論は無いと思います。しかし、身体と脳の関係はいうまでもありませんが、非常に密接です。身体からの入力が無いと、脳はひとりでもありもしない情報を作り出したりします。つまり、脳と身体は切り離せない関係にあるといえます。すなわち、心は脳と身体 of 融合体に備わると考えられるでしょう。

全人的学問としての脳科学

今私たちは、脳の機能の最小単位を探し出すために、あらゆる視点から脳を調べています。このことが、「私たち自身の考えや気持ち」がどのように作られていくのかの理解につながると考えています。また、脳や心の健康を害する病の理解にも貢献できると考えています。さらには、夫婦関係や母子関係、社会組織の関係についても理解が深まれば、経済発展や世界平和にもつながるのでは無いかと考えています。

みなさんも、今一度一番身近なところから一番見えにくい「自分」について思いを巡らせ、夢や理想について考えてみましょう。そうすれば、自分や相手の存在の尊さや重さに気づくことができるかもしれません。そうになったら、チャンスです！一緒に知の扉を開けて、探求の海へ乗り出しましょう。